地域密着企業による歴史的資産とナラティブの
ホリスティック保存を通したまちづくりCSVモデルの開発

研究代表者　林　廷玟
（理工学術院総合研究所　次席研究員）

１．研究課題

本研究は地域密着企業である中小規模の建設業に着目し、同企業が地域資産である歴史的資産を有効に活用し、共有価値の創造を行うための「まちづくりcsv」モデルの開発を試みるものである。

近年、地域に根付いたビジネスを志向する民間企業（以下、地域密着企業）が、業務の一環としてまちづくりに参画する動きが増えている。このような地域密着企業が公共サービスの市場化や各種PFI事業への参画などを通してまちづくりに参画し、「まちづくりマネジメント」を事業化することで、地域社会においてより大きな役割を果たす事例が見られており、民間のリソースや知恵、柔軟性を源泉とした民によるまちづくりを推進していくことは時代の要請である。

こうした背景を受け、本研究では地域密着企業が地域資産を有効に活用し、まちと企業の価値を同時に高める「まちづくりCSV(Creating Shared Value)」を実現するための具体的な手法を開発することを目的とする。具体的には、地域資産の一つである歴史的資産の活用に着眼する。従来の歴史的資産の点的保存から面的保存への移行に向け、地域のナラティブの効果を活用し、地域が歴史的資産を活かしたまちづくりCSVを実践する手法開発を行い、その知見をもとに他事例へも適用可能な「モデル」として一般化する。

本研究では、現行の歴史的資産の保存活用実態をうけ、現在手薄となっている歴史的資産をとりまく有形無形要素の包括的保存の解法に対し、ナラティブ・アプローチの考えを適用した、候補者が提案する「ホリスティック保存」の考えを援用することで、これまで十分になされてこなかった歴史的資産間に生じる関係性を評価し、まちづくり手法に応用するものである。ものとものの間に生じる関係性が着目されつつも、その手法が確立されていない歴史的建造物の保存の分野において、要素間補完の解法の提示を試みる有用的な研究であり、今後の地域のナラティブの継承による内発的まちづくり手法の開発に対して重要な視座を構築するものである。

２．主な研究成果

本研究は、具体的には以下3つの研究課題からなるものである。

（研究１）地域内で活用可能な歴史的資産の抽出とインベントリ開発によるデータ整備
（研究２）歴史的資産に関するナラティブの収集と市民への還元手法の検討

（研究３）歴史的資産とナラティブの相互連関から成立する「ホリスティック保存」手法を活用した「意味的な統合を持つ資産の保存」のモデル化

研究は 2023 年度 10 月から実施され、2023 年度は初年度にあたり、研究 1 および研究 2 について進められている段階にある。

歴史的資産の抽出およびインベントリ開発によるデータ整備にあたり、地域密着企業によるまちづくりが実施されている地域において、歴史的資産と住民の関係性を明示化するためにナラティブ（オーラルによる語り）の収集・調査を行なった。ナラティブは得られた音声データをテキスト化し、言葉の始まりから句点までを 1 区切りとしデータ化を行なった。研究者の提唱するホリスティック保存[引用 1)]に基づき、KJ 法に準ずる方法で語りごとに分類し、「モノ・コトにまつわるエピソード」「場所にまつわるエピソード」「対象を限定しないエピソード」のエピソード空間特性別に大別した。大別したエピソードごとに、内容の関連性や類似性を示す共起ネットワーク図(Co-occurrence Network Diagram)を描くことで地域内での歴史的資産の立ち位置や価値付けを把握し、インベントリ開発のデータ整備に活用した。なお、共起ネットワーク図では、単語の出現回数のみでデータの重みづけを行うのではなく、文書中の単語頻度 term frequency と逆文書頻度 inverse document frequency を掛け合わせたナラティブ内の単語の重要度を測る tf-idf 値を算出することで、インベントリ開発のデータの精緻化を実施した。この処理は研究者によるホリスティック保存[引用 1)]提唱においても用いられた処理である。以下に計算式を示す。

図 1:ナラティブにより描かれる
共起ネットワークの例

$$tfidf_{i,j} = tf_{i,j} \cdot idf_i \quad (1)$$

$$tf_{i,j} = \frac{n_{i,j}}{\sum_k n_{k,j}} \quad (2)$$

$$idf_i = \log \frac{|D|}{|\{ d : d \ni t_i \}|} \quad (3)$$

$n_{i,j}$…文章d_jにおける単語t_iの出現回数 ， $\sum_k n_{k,j}$ …文章d_jにおける全単語の出現回数の和
$|D|$ …総文書数 ， $|\{ d : d \ni t_i \}|$ …単語t_iを含む文章の数

2023 年度に得られた成果に基づき、より研究 1 および研究 2 を加速化させることで、データ整備の完了と市民還元手法の検討を実施する。

引用 1)林　廷玟,「ナラティブの継承を通じた近代化産業遺産の保存手法に関する研究 -産業関連施設群の「ホリスティック保存」を目指して-」, 早稲田大学大学院創造理工学研究科博士論文, 2023.2

３． 共同研究者

後藤　春彦（創造理工学部建築学科　教授）

４． 研究業績

4.1 学術論文

村松 美邑, 後藤 春彦, 山村 崇, 林 廷玟, 景観解釈における「知」を介した意味構成過程とその構造―個人的な経験としての「景観」の分析を通じた「構成される意味」論の試み―, 日本建築学会計画系論文集 88 巻 813 号, p. 3018-3029, 2023.11

５． 研究活動の課題と展望

本研究を通して、歴史的資産に対して蓄積されてきた無形の価値を含め継承を支援する社会技術を獲得する。その成果は、地域資産保存と開発が協調共存した郊外都市のありかたを示すことで、地域密着企業が「量産・売り切り」の短期志向を脱して、まちの価値と企業価値を同時に高める「価値提案型」の高付加価値ビジネスモデルへの転換を可能とするものであり、「まちづくり CSV」のモデルケースとなることが期待される。

次年度は、さらなるナラティブの収集とデータ整備によって、市民へのナラティブ還元手法の開発に取り組む。歴史的資産を中心として形成される物語の持つ役割や機能メカニズムを詳細に明らかにし、同一の理論枠組みのもとで歴史的資産保存の実態を分析し、地域全体でのナラティブ活用の有用性を示すことは今後のまちづくり事業展開において必要不可欠な視座を提供するものである。